

## へびキニくの広がりをもふまえて

——『隠されたヒバクシャ』／グローバルヒバクシャ研究会／『原爆・原発』(池山重朗)／『棄民の群島』(前田哲男)を読む

天野恵一

加藤一夫が「ビキニからフクシマへ——原点としてのビキニ事件」(『運動(経験)』34号、二〇一一年二月)で以下のように主張している。

「第五福竜丸事件の歴史的意思是、被曝したこの漁船が無事帰港したことによって、核実験とその影響を全世界に知らせたことにあるのだが、漁船は第五福竜丸だけではない。その後、東京築地に入港した漁船一〇九隻に水爆実験を目撃した船の存在が確認されている。釜石、清水、三崎、高知、和歌山でも多くの漁船が被曝した。高知については八〇年代半ばから高校生たち(幡多高校生ゼミナール)が中心に調査してきた。沖縄、韓国、台湾、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピンなどでも被曝が報告されている。韓国では日本の古いマグロ船を購入し、その中に被曝船があったことも分かっている。日本だけでも一〇〇〇隻以上の漁船が被曝している。なぜ、漁船や船舶の事故が続いたか、それは、フクシマ同様、正確な情報を伝えな

つたからである」(傍点引用者)。

加藤は、ここで「ビキニ」全体の氷山の一角にすぎなかった「第五福竜丸」のみが注目されたのは全体が巧妙に隠蔽されたからであると力説している。「第五福竜丸」で広島・長崎について「または日本人が」といった被害者ナショナリズムに閉ざされたエネルギーが、日本の原水爆禁止運動に火をつけた歴史。私たちは「世界」に向かってアビールを拡大していったこうした運動の巨大なうねりについては、よく知られている。

加藤は、その閉鎖性を問題にすることよりも、実は「ビキニ」それ自体が、そうした閉鎖性を突き破る契機をも、当然にもつくりだしていた事実(隠蔽され続けてきた)それにこそ着目し続けることの必要性をここで論じているのである。

「米・英・仏三国が太平洋全域(オーストラリア大陸を含む)で行った核兵器実験の全体数を集計しておく、以下のようなになる。ただし一九五四年三月一日までに実施されたのは、ビキニとエニウエトク両環礁でのアメリカの十一回(ほかにネバダで三〇回)と、エミュー、モンテ・ペロ島におけるイギリスの三回、フランスの場合はすべて『ビキニ水爆被災』以後に属する。また同時期のソ連の実験は五回であった。したがって、太平洋地域における核実験総数は三二七回。ビキニ水爆被災以前は一四回ということになる」。次に前田によって示されたリストを表に示す。

圧力によってかけられたベールをはがし、「全容の解明」に向かつての努力がさまざまな本をここで紹介したい。

まず加藤がここでふれている、「グローバルヒバクシャ」研究会編の『隠されたヒバクシャ——検証Ⅱ裁きなきビキニ水爆被災』(凱風社、二〇〇五年)である。

この本の監修者は、まちがいがなくビキニ被爆取材の先駆者の一人である前田哲男。第一章「ビキニ水爆被災の今日的意味」で、彼は『核兵器と植民地支配』が合体してつくりだした現代国家による権力犯罪であった」との結論を語り、その核実験なるものがマーシャル諸島先住民をモルモットにした「人体実験」であった疑いを必然化する事実を、時間の経過にそってレポートしている。核実験の全体数については、このように集計されている。

「米・英・仏三国が太平洋全域(オーストラリア大陸を含む)で行った核兵器実験の全体数を集計しておく、以下のようなになる。ただし一九五四年三月一日までに実施されたのは、ビキニとエニウエトク両環礁でのアメリカの十一回(ほかにネバダで三〇回)と、エミュー、モンテ・ペロ島におけるイギリスの三回、フランスの場合はすべて『ビキニ水爆被災』以後に属する。また同時期のソ連の実験は五回であった。したがって、太平洋地域における核実験総数は三二七回。ビキニ水爆被災以前は一四回ということになる」。次に前田によって示されたリストを表に示す。

福竜丸を被爆させた水爆プラボアの爆発(「プラボア実験」)は、このような「核の植民地のまったただなかで、また、核開発競争の絶頂期に行われた」もので、一九五四年という日本が独立を回復した直後(二年後)で、「かつての『日本領南洋群島』、いまは米施政下の『太平洋諸島信託統治領(TPTI)』となったミクロネシア周辺海域で遠洋漁業の再開が可能となった時期でもあった」と前田は論じている。

このプラボア実験によって被爆した福竜丸が焼津港に帰還した三月一日から二ヵ月後(五月一日)に水産省の俊鶴丸という調査船が出航している。前田も、この調査船がそれなりにキチンと調査し、それが世界に向かつて発信されたことの重大さをここで指摘している。それこそがグロ

要であると思う。

確かに、こうした運動史への思想的視座は、決定的に重要であると思う。

もう一つ、一九六三年に締結された「部分的核実験禁止条約（PTBT）」についてふれた文章の方も引いておこう。

「初の核実験禁止国際条約——それが死の灰の無制限な撒き散らしを禁止したとしても核廃絶の役に立たないではないか、地下核実験という新たな合法的抜け穴をつくる手助けとなっただけではないか、という議論はさておくとして、PTBTを締結させる国際世論の結果に科学者が果たした役割は大きかった。俊鵬丸の調査がきっかけとなり、世界各地で活発な環境調査や疫学的研究が行われるようになり、残留放射能の後遺的影響と人体の晩発的・遺伝的障害がつきつきと究明されていった。それは広島では隠されてきた『ピカドン』の効果だけにとどまらない核兵器のもう一つの本性をより明白にし、核と人類の共存不可能性を国際社会に警告するものとなった」（傍点引用者）。

前田は、この文章を核廃絶に向かって『ピキニ水爆被災』がいまも発しつづける声に耳を傾け、次の課題をこそ果たさなければならぬと結んでいる。

「◆いまだに確定されていない被害の全体像——第五福竜丸以外に九〇〇余隻の日本漁船、二万人ちかい指定被爆者の所在確認と健康調査。◆世界に散在する『グローバル・ヒバクシャ』——モルロア（仏）、クリスマス島（英）、カザフ（ロ）、新疆ウイグル地区（中）、ポカラン（印）、チャガイ（パキスタン）における住民と環境の実態解明。◆イラク戦争と劣化ウラン弾の恐怖——核爆弾ではないが、放射性物質、爆弾という新しい問題。五〇年前におきたピキニ水爆被災は、さまざまな問題を当時の日本と世界に投げかけ、その後の民衆運動、国際世論に大きな成果をもたらしながらも、しかしまだ完全に終わったわけではないのである。新たな核拡散も懸念される。核とテロリズムの合体というおぞましい事態も空想の世界ではなくなった。その意味からも、広島・長崎の体験を継承しつつ、同時にピキニ水爆被災についてよりふかく知ること、いまだ救済されていない『グローバル・ヒバクシャ』に思いをはせながらヒロシマ・ナガサキのメッセージをつたえていくことが、『被爆六〇年後以降』のためにも必要なのである」。

この呼びかけの切実さは、福島原発事故大被災の、終わりのない状況を生き続けている今の私たちの耳に、さらにリアルに響いてくる。

この本の第二章には高橋博子の「第五福竜丸被災とアメリカ政府の対応——隠された被ばく情報」が収められて

表

	場所	実施年	回数	実験方法
アメリカ	ビキニ環礁	1946～58	24	大気圏内（塔、はしけ、空中投下）、水中爆発
	エニウエトク環礁	1948～58	43	大気圏内（同上）
	ジェンストーン島	1958～62	12	大気圏外（超高空爆発）
	アムチトカ（アラスカ）	1969～71	2	地下爆発（立坑）
	クリスマス島（英実験場）	1962	24	大気圏内（塔、空中投下）
	クリスマス島沖	1962	1	大気圏外（超高空爆発）
	カリフォルニア沖	1962	1	アスロック対潜爆雷（水中爆発）
(Nuclear Weapons Databook, Vol. 1, Ballinger Publishing Company, 1984より引用者集計)				
イギリス	モンテ・ペロ島	1952～56	3	大気圏内（塔、水上）
	エミュー	1953	2	大気圏内（塔）
	マラリング	1956～57	7	大気圏内（塔、空中投下）
	モールデン島	1957	3	大気圏内（空中投下）
	クリスマス島	1957～58	6	大気圏内（気球繫留、空中投下）
(Dery Blinkway & Sue Lloye-Roberts, Fields of Thunder: Testing Britain's Bomb, VNWIN PAPERBACKS CURRENT AFFAIRS, 1985所収)				
フランス	セルロア環礁	1966～74	41	大気圏内（はしけ、気球、空中投下）
	セルロア環礁	1975～96	143	地下爆発（環礁、珊瑚の立坑）
	ファンガタウファ環礁	1966～70	5	大気圏内（はしけ、気球、空中投下）
	ファンガタウファ環礁	1975～96	10	地下爆発（環礁、珊瑚の立坑）
(Nuclear Weapons Databook, Vol. 1, のデータに95年再開後の6回を加算して補正)				

ーバルヒバクの存在告知になったという。

「核実験の結果、大規模な海洋と大気の汚染は地球規模におよんだ事実が判明した。俊鵬丸の調査結果は、いまだはだれでも受け入れる食物連鎖と個体濃縮による生態系攪乱のメカニズムを科学的なデータにより疑問の余地なく証明する先駆的な研究となったのである。／したがって、次のようにいうこともできる。もし、あるとき、あの海域で福竜丸が被災しなかったならば（俊鵬丸がピキニ海域に行くことはなかったはずだから）、一九五四年の時点でピキニ水爆被災の全貌と影響が明らかになることはなかっただろう。米当局によって、住民被災の事実と死の灰の影響は『戦略統治地域』のさらに内側に置かれた『閉鎖地域』という二重に隔離された場所でひそかに処理され隠蔽されつづけたにちがいない、その後の『国と国際世論』の関係はことなる展開をたどった可能性はつよい」。

「その意味で、福竜丸はみずからの不幸な運命と引き換えに、『ピキニ水爆被災』の真実を世界に告知する、ホイッスル・ブローア（告発者）の役割を担ったのだといえる。乗組員にとつては、このうえない不幸であったが、その時そこにいたこと、そしてそこから帰ってきたことによつて、マトシヤル諸

いる。

それは、第五福竜丸被災の時、被災した方に原因を押しつける言動がアメリカに組織された事実のレポートから始まる。「隠す」側の論理を歴史的に批判的に検証してみせる作業である。

「実験当局者である『米原子力委員会 (Atomic Energy Commission) のルイス・ストロース (Lewis Strauss) 委員長は、第五福竜丸は実験前に指定された『危険区域』に侵入していたのではないかとの見解を出し、極秘にスパイ事件としてCIA (米中央情報局) に調査を依頼していた。また米原子力委員会は、一九五四年九月二三日に第五福竜丸乗組員の久保山愛吉無線長が死亡したことについても、水爆による犠牲者とは認めていない。／その一方で、日本における反米感情の激化を危惧したアメリカ政府は、一九五五年一月、『法律上の責任問題に関係なく』日本政府に慰謝料として二〇〇万ドルを支払う、という政治決着を図り、以後解決済みの問題として第五福竜丸の被災を扱ってきた。つまり、アメリカ政府は核実験によって犠牲者を生みだしたことに對する責任を、事実関係に基づいて問われることなく、今日まで至っているといえる。／しかし、核実験による被ばくが従来知られていたよりはるかに甚大であったことは、近年公開された文書や証言収集活動によって明らかになりつつある。米エネルギー省により

ジャーナリストでは前田哲男らが牽引車となり、『第五福竜丸の向こう側』(前田哲男) に広がる、マーシャル諸島ロングラップ環礁の人びとのヒバクの実態が徐々に明らかにされていった。くわえて、ヒバク当事者であるロングラップ環礁を中心とする現地の人びとがくりかえし日本に訴えにきたこともあり、日本におけるビキニ水爆被災像は、『日本人の三度の被災』(広島・長崎・第五福竜丸) というナショナルな枠内にとどまらず、ロングラップ環礁の人びとの被災も含むものへと徐々に広がりを見せるようになっていった」(傍点引用者)。

私たちの視座も、この「ナショナルな枠」をこえて、広がっていく方向へ、キチンとすえられなくてはなるまい。

第四章「ヒバクは人間に何をもたらすのか——忍び寄る核実験の影」も竹峰によって書かれている。このレポートは、ガンの被害だけでなく、命をはぐぐんできた土地を奪われ、失った大量の人びと(移住あるいは再定住を強いられてきた)の被害の生活実態にそくした、〈核〉批判である。

第五章は中原聖乃の「挑戦するロンゲラップの人びと

——生活圏再生の民族誌」は、それでもアメリカにそして信託統治領政府に抵抗しながら生き続ける「ロンゲラップの人びと」のレポートである。それは、こう結ばれている。

「現在、人びとは裁定委員会に、北部環礁をクリーンア

一九九〇年代に公開されてきた公文書によって、従来知られていなかった米核実験による被災状況がようやく明らかになってきた。しかし、未公開の文章も多く、公開された文書の分析もまだ充分になされていないとはいえない。／つまりビキニ水爆被災の真相はいまだに充分に明らかにならず、被ばく者がどのように生みだされ、今どのような状況に置かれているのかは、いまだに実態がつかめていないのである。核兵器による被害の真相は充分に世界に知られていないのが現状である」(傍点引用者)。

彼女のレポートは、近年公開された文書にもとづいて、伏せられ、隠されてきた事実を、「隠す側」の論理(工作)を明らかにしつつ、光を具体的に当てる作業である。

こうしたグローバル被爆者の実態解明へ向けた作業を、広くマーシャル諸島ロングラップ環礁の人びとの被爆の実態にそくして展開しているのが、第三章の竹峰誠一郎の「塗り変えられる被災地図——隠されたヒバクシヤを追う」である。実は被災地は、最初に語られていたより、はるかに広い事実を具体的に示している。このレポートの書き出しの部分にこうある。

「被災地から一五年以上経た一九七〇年代以降になると、日本でも核実験場とされたマーシャル諸島に目を向ける動きが見られるようになった。原水爆禁止運動では原水爆禁止日本国民会議(原水禁)の池山重朗事務局次長(当時)、今、〈核〉の問題を、広島・長崎・ビキニ・福島を語るうとするとき、必ず読んでおかなければいけない一冊であろう。この本のラストに「あとがき」にかえて座談会が収められている(「ビキニ水爆被災 過去に問い、未来につなげる」)、そして終章の扉には座談会メンバーにういて、以下のように書きこまれている。

『「ビキニ五一年」が経過したある日の夕刻、一〇代から七〇代の八名が集い、第五福竜丸の船体を背に語り合った。ビキニ問題の先駆者である池山重朗氏とジャーナリストとして原水禁運動に長く関わってこられた岩垂弘氏、広島出身の二名の学生さん、そして本書の執筆者四名である。／『ビキニ』は私たちの現在、未来に何を問いかけているのか——グローバル・ヒバクシヤ研究会が呼びかけて実現した座談会の要旨を『あとがき』にかえて収載し、本書のまとめとする』。

この座談会出席者である池山重朗は、一九七八年に現代の理論社から『原爆・原発』を出しており、この原水禁運動史を語るときかかせない著作の第四章に、「見はなされてきた水爆実験の被害者——ビキニ水爆実験によるマー

シャル諸島の被爆調査報告」という文字通り先駆的レポートが収められている。そこには、こう書かれている。

「われわれは十七年前にマーシャル群島で起こった悲劇を直接に見聞し、ビキニ事件をより立体的に捉えることができた。これまで、第五福竜丸乗組員の被災と、日本本土にばらまかれた「死の灰」を通じてこの事件を見てきた。だが、今回南太平洋の彼方から水爆実験をとらえ直してみて、この実験の無謀さが改めて実感できる。それとともに、このような暴挙を許さないためには、運動を狭い一国の範囲にとどめず、不幸な民衆が国際的に手をとりあつて、運動を強めなければならぬことを痛感した。われらはマジユロ島で十七年前のビキニ事件を改めて追体験した思い一杯である。かかる悲劇を繰り返させてはならないという決意をこめつつこの報告を終える」(傍点引用者)。そこには「一九七一年一月三十一日記」とある。

もう一人の座談会参加者、前田哲男は一九七九年に『棄民の群島——ミクロネシア被爆民の記録』を時事通信社から刊行している(一九九一年、『非核太平洋 被爆太平洋——新編棄民の群島』とタイトルを変えて筑摩書房より再刊)。前田は、このアメリカの水爆実験に巻きこまれた太平洋の島々の住民たちの、このうえない悲劇の物語(現地を足で歩いて、まとめあげた貴重なレポート)を、こういう言葉で結んでいる。

つながることはないということ。／3・11以後の状況から過去の運動の限界や反省を指摘する声も至る所であがっている。当然だろう。ただ歴史の後知恵で過去を断罪しても意味はない。／これまで、私たちも、核兵器廃絶を目指す運動を行ってきたが、民生利用の核問題である原発については、意図的に触れずにきた。しかし、3・11以後、そこに留まることはもはやできなくなっている。市民との勉強会では、かなり以前から原爆＝原発の論理で、原発の危険性を確認し、原発の影で核兵器開発を目論む一部の政治家の意図や動向も見え始めていた。それゆえ、フクシマ以後、当然、ビキニ事件の検証から脱原発運動へとシフトしつつある。／焼津市は、御前崎の浜岡原発から二五〇三〇キロ圏内にある。当然、脱原発運動は、この原発の永久停止(廃炉)を目指すことになる。ただ、これまでやってきた生活レベルで非日常的な位置にある核兵器廃絶運動とは違い、原発廃炉運動は、地域の生活そのものと密接に関わっている。反の論理を掲げるだけでは、小さなサークル活動になってしまい、地域活動になりにくい。／新たな模索は、始まったばかりである」。

私たちも、各自の足もとの「模索」を持続するしかあるまい。紹介したいいくつかのもの(「ビキニの恐怖」のリアルなレポートをもふまえつつ。

「ネバダ実験場周辺では、数すらはつきりつかめていない多数の住民に核実験の後遺的影響が懸念されている。スリ・マイル・アイランド原子力発電所の事故がビキニやネバダの核実験の影響と別次元の出来事であるという人は、もはやいないだろう。一九五四年三月一日、マーシャル諸島北部の島民が味わった恐怖の世界は、今日、われわれの隣りに無数ある。これがビキニの意味である。ビキニのもたらした『原子爆弾の効果』とは、そのようなものなのである」(傍点引用者)。

前田の想像力は池山同様に、原爆被災(放射能被災)を「死の灰」を媒介通路として(原発)の問題にまでリアルにつなげている。

かつてマーシャル諸島住民があるいは、ネバダの住民が味わった「恐怖の世界」を、今、日本列島住民が特に東北地方を中心としてリアルに味わい続けているのだ。それが「福島」以後の私たちの現実である。

最初に紹介した加藤の論文に戻ろう。彼はその文章を、このように結んでいる。

「結びに再度確認したい。ビキニ事件とは第五福竜丸をはじめ多くの漁船・貨物船が被曝し、太平洋海域を汚した出来事であるが、この真相をアメリカも日本政府も情報を隠蔽し、汚染を過小評価し、闇に葬られた事件である。この事件を再検証し、そこから学ばなければ、フクシマに